

黒人音楽から見る人種問題

——プロテストソングは若者に受け入れられるのか——

はじめに

音楽は社会を映し出す。政治的に抗議する歌、プロテストソングは同じような境遇の人たちを団結させ、異なる人たちにもメッセージを訴えかけることで心を動かし、時には社会を動かしてきた。しかし日本ではどうやら政治を音楽に持ち込むなという言葉があるらしい。プロテストソングは日本の若者には受け入れられないのか。若者も政治に関わり、音楽によって抗議することもあり得ることだと示すことが本研究の目的である。

結果

日本でも 1960 年代にアメリカの影響で関西フォークを例に政治と音楽の接近が見られた。しかし 1970 年代では学生運動が沈静化し、音楽に政治が距離を取り、音楽に政治を持ち込むことがタブー視され始めた中で、反原発運動を通して再び接近する様子が見られた。反原発運動に参加を機に若者が政治に対して関心を持つ変化が見られ、他のデモに参加すると同時にそのデモにはサウンドデモといった音楽を用いた新しい社会運動が行なわれた。そして SNS によりアイデンティティを超えて参加できるようになったことから、日本でも BLM 運動に参加し、東京や名古屋でデモが行なわれ、そこには若者が中心となっていることや、アメリカのプロテストソングが聴かれていた様子が確認できた。

考察

日本の若者は政治的問題を身近に感じる機会がなく、そこで問題が起きても重要視せず、さらにどう動いて良いのかも分からない状態だったのだろう。音楽に政治を持ち込むなもその現れだと考えられる。そこで反原発運動で実際に政治的問題に立ち向かうことで政治の参加するハードルが下がり、関心が持てるようになった。加えて SNS は問題を可視化することで問題を認識し、個人で情報を集めやすく、そこから BLM 運動への参加を可能にしたのである。

結論

反原発運動を通して政治的関心を持ち、SNS により団体だけでなく個人で参加することを可能にしてアイデンティティに属しない人たちも運動に携われるようになった。反原発の後のストリートで行なわれたデモはサウンドが使われるようになっていたことや、BLM 運動の名古屋のデモでは若者中心の企画だったこと、Spotify の日本チャートにアメリカプロテストソングがランクインしていることから日本の若者にもプロテストソングは受け入れられるといえる。